旧宣教師館イベント報告

オータムコンサート「チェロの音色に親しむ」開催！

2023（令和５）年11月５日（日）にチェロ奏者の飯島奏人（いいじま かなと）さんをお迎えして、約３年ぶりにオータムコンサートを開催しました。様々な制限が解除され、久しぶりの開催となりましたが「開催を心待ちにしていました」というお客さんもおられ、当初の定員を大幅に超える40名の方にご来場いただきました。

歴史ある当館の中で響くチェロの音色とガラス窓から差し込む温かな光は、コンサートホールとはまたひと味違った悠久の時を想わせる贅沢な空間を創り出します。クラシックからジャズまで飯島さんのオリジナル４曲を含む計８曲、圧巻の演奏でした。

▲演奏中の様子。

また MC ではチェロの仕組みを詳しく解説してくださるひとコマも。弓が馬の尻尾から作られているのを、取り外して構造を丁寧に説明してくださり、皆さん貴重な機会に興味津々で見入っていたのがとても印象的でした。

▲アンコール前のひとコマ。

お客さんからも「近い距離で演奏が楽しめてよかった」や「館内の雰囲気と演奏が印象に残った」など嬉しいご感想をたくさんいただきました。曲の演奏にとどまらず様々な観点からチェロを楽しむという、まさに「チェロの音色に親しむ」当館ならではのコンサートになったかなと思います。

次回は2024（令和６）年５月にスプリングコンサートを開催します。当館の食堂に設置してある 80 年ほど前に作られたウエスタンピアノを楽しんでいただく予定です。文化財建築で味わう素敵な音色を、ぜひ聴きにいらしてください♪

（中村 岳）

ZOSHIGAYA MISSIONARY HOUSE MUSEUM

雑司が谷旧宣教師館だより

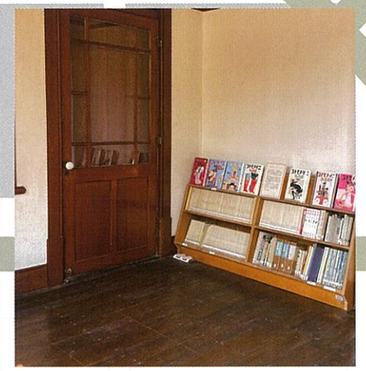
第７１号　2024年１月22日

豊島区立雑司が谷旧宣教師館
〒171-0032 東京都豊島区雑司が谷 1-25-5　TEL/FAX　03−3985−4081
http://www.city.toshima.lg.jp/bunka/bunka/shiryokan/index.html

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

としまと『赤い鳥』

旧宣教師館はじめての企画展を振り返る


▲開館当初から配架されていた、復刻版『赤い鳥』。
◀区制 90 周年企画展入口。

豊島区区制施行 90 周年と企画展「としまと『赤い鳥』」

雑司が谷旧宣教師館の所在する豊島区は、2022（令和 4）年に区制 90 周年を迎えました。これに際し、当館では区制 90 周年雑司が谷旧宣教師館企画展「としまと『赤い鳥』～区制 90 年を彩る児童文化～」（2022 年 10 月 1 日～ 2023 年 5 月 28 日）を開催。来館者からご好評をいただきました。

この展示は、豊島区が 1932（昭和 7）年に誕生する以前、1918（大正 7）年に作家・鈴木三重吉（すずき みえきち）によって創刊された児童雑誌『赤い鳥』が、1936（昭和 11）年の終刊後も、現代に至るまで影響を与えた様子を、豊島区に関連する作家を中心に取り上げたものです。

次のページからは、旧宣教師館はじめての企画展示がどのように企画されて実現したか、振り返っていきます。

としまと『赤い鳥』
― 旧宣教師館はじめての企画展を振り返る ―

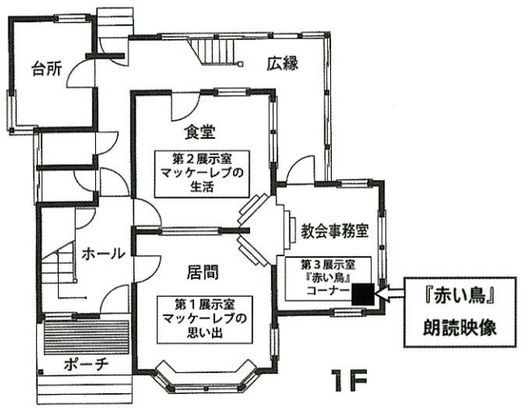
どうすれば『赤い鳥』を知ってもらえるか

90 周年展示を企画するにあたって大切にしていたことが 2 つあります。1 つ目は、豊島区で誕生した『赤い鳥』がどのような雑誌か、どのような影響を与えたかを伝えることでした。『赤い鳥』は知らないが、掲載作品である芥川龍之介の「蜘蛛の糸」、新美南吉の「ごん狐」は教科書で読んだことがある、という方は多いと思います。人々の記憶に残り、影響を与えてきた作品を生み出した童話雑誌が誕生した理由や、後世に与えた影響を、展示で伝えたいと考えました。

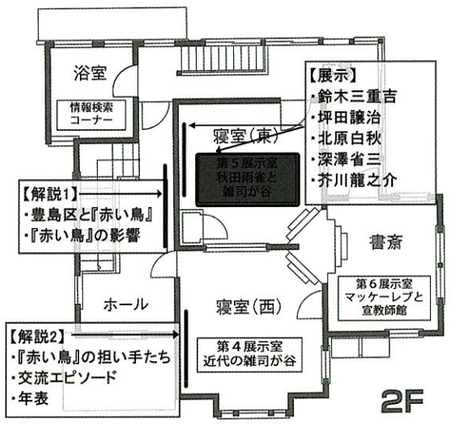
2 つ目は、『赤い鳥』と作家たちに親しみをもってもらうことです。来館者が展示を見た時に、「こういう児童雑誌があったのか！」、「この作家は知らなかったけれど興味が出てきた」と感じて楽しんで欲しいと考えました。これについては、作家たちの交流エピソードを展示で取り上げることで、どのような交流の中で『赤い鳥』が作られたかを知ってもらい、興味を感じてもらえるよう努めました。

展示の構成

展示会場の構成は下図（図 1、図 2）の通りです。普段は 1 階、2 階ともに常設展示がおこなわれている旧宣教師館ですが、企画展のために、2 階の寝室（東）の秋田雨雀の展示物やパネル類は一時撤去することになりました（図 3）。空になった展示ケースや壁面は、鈴木三重吉、坪田譲治、北原白秋、深澤省三、芥川龍之介の展示解説スペースに変更します。また、復刻版の『赤い鳥』を配架している 1 階の『赤い鳥』コーナーでは、詩人の小森香子先生による『赤い鳥』作品の朗読映像を流すことにしました。2 階をメインの展示会場としつつ、1 階では実際に『赤い鳥』の作品を読み、朗読を聴くことで、『赤い鳥』を様々な角度から楽しむことができます。



▲（図 1）『赤い鳥』コーナーでは、『赤い鳥』の自由閲覧と朗読映像で「見て聞いて楽しい展示」を目指しました。



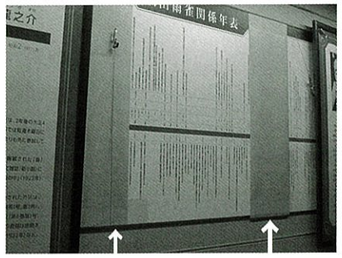
▲（図 2）廊下の【解説 1】、廊下の隣の部屋の【解説 2】で赤い鳥の概要などを解説した後に【展示】の部屋で 5 人の作家たちを取り上げる構成にしました。

メイン会場の入り口となる 2 階の廊下には、展示の導入部として「豊島区と『赤い鳥』」「赤い鳥の影響」の解説パネルを配置することにしました（図 4、図 5）。

ここでは、『赤い鳥』が現在の目白にあった三重吉の自宅で発行されたことや、三重吉の他にも豊島区に住んで執筆に取り組んでいた作家が少なくなかった点をとりあげました。

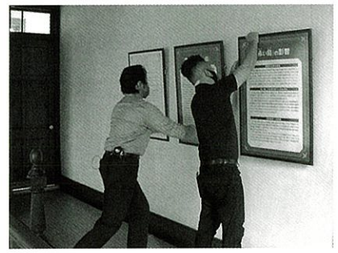
また、『赤い鳥』の発行の理由として、三重吉がそれまでの子ども向けの読み物とは違う、上質な童話と童謡を掲載する児童向け雑誌を制作しようと考えたこと、同時にそういった役割を担う作家たちを育てようとしたことが挙げられます。この三重吉の考えに触発されて、同じように児童文学の芸術性の向上を掲げる童話雑誌が続々と生まれました。

終刊後も影響は続き、1946（昭和 21）年に発行された児童雑誌『赤とんぼ』（実業之日本社）の編集者・藤田圭雄が創刊の辞で「鈴木三重吉氏によって主唱された赤い鳥の運動をわれわれはまだ昨日のように覚えている」と述べたことからも窺えるように、同時代だけではなく、戦後の児童雑誌や作家たちに影響を与え続けていました。このような点から、豊島区が「児童文化発祥の地」ともいわれる由来を示しました。



▲（図 3）　壁から取り外せない年表があったのですが、壁と同じ色のシートを貼り、隠しました（画像↑部分）。

▲（図 4）



（図 5）

2 階の廊下では、ピクチャーレールが天井際にあるため、脚立を使用しての作業になりました。

さて、廊下から部屋の中へ入ると、「赤い鳥の担い手たち」と題した展示が始まります。ここでは、前述した 5 人の人物と、彼らの交流エピソードを取り上げました。

まず、『赤い鳥』を語る上で、生みの親である鈴木三重吉の存在は欠かせません。自作の童話だけでなく、海外作品の翻案も掲載するなど、『赤い鳥』の発展に力を尽くしました。特に、子どもたちに作文の投稿を呼びかけ、投稿作品を掲載し、選評も行う「綴方」は特徴的であり、学校教育の一環として取り入れる教師も現れました。

坪田譲治は、深澤省三の紹介で『赤い鳥』に自身はじめてとなる童話「河童の話」を発表した作家です。以降は 40 篇余りの童話を投稿しました。「第二の『赤い鳥』」を目指し、昭和 38（1963）年に私費で童話雑誌『びわの実学校』を創刊したこと、また、池袋の自宅に私設図書館ともいうべき「びわの実文庫」を設けて、地域の子どもたちや研究者が活用できる場を作ったことで、豊島区の児童文学の歴史において避けては通れない人物です。

展示の振り返りは、次号（72 号）にも続きます。北原白秋、深澤省三、芥川龍之介の展示の紹介をはじめ、現代に続く『赤い鳥』の魅力に迫りたいと思います。ぜひご一読ください。

（小山　勝美）